

少女漫画における ジェンダー規範の転換と女同士の絆 —『週刊少女フレンド』1963～1972年の分析から—

Shifting Gender Norms and Female Same-sex Intimacy in Shōjo Manga

An Analysis of Works in *Shōjo Friend*, 1963-1972

上村 太郎 Taro KAMIMURA

京都大学大学院教育学研究科修士課程／教育社会学、ジェンダー研究

◆ 要旨

少女漫画は一般に恋愛を描くものとされ、女子・女性同士の親密性が描かれることは少ない。本稿ではこの欠如を問題意識とし、1963～72年の『週刊少女フレンド』における同性間の親密性の表象を調査し、少女漫画に異性愛が導入される過程において同性間の親密性がいかに扱われたかを検討した。同性間の親密性は旧来的な少女文化により価値づけられていたが、異性愛の称揚へという価値転換が進む中でその価値づけが失われ、ありふれたものとして描かれるようになった。やがて誌面に恋愛が定着した1970年前後には、同性間の親密性も異性愛規範のジェンダー秩序を反映し、周縁化・劣位化されることが多くなる。しかしその中でも、読者の共感を呼ぶ身近な友情、恋愛を通じた同性間の結びつき、異性愛規範と衝突しない設定の上での同性間の強固な親密性、「女性同性愛」の逸脱視の相対化など、異性愛規範と折り合いを付しながら同性間の親密性は描かれ続けていた。

◆ Abstract

Shōjo manga is generally considered to depict romance, but female same-sex intimacy is rarely depicted. This paper examines the representation of same-sex intimacy in *Shōjo Friend* from 1963 to 1972, and argues how same-sex intimacy was treated in the process of introducing heterosexuality into shōjo manga. Same-sex intimacy was valued by traditional shōjo culture, but as the value shifted toward the celebration of heterosexuality progressed, it lost its value and came to be depicted as hackneyed. Eventually, around 1970, when romance was firmly established in magazines, same-sex intimacy was often marginalized and subordinated, reflecting the gender order of heterosexual norms. However, even in this context, same-

sex intimacy continued to be portrayed while coming to terms with heterosexual norms through familiar friendships that elicited sympathy from readers, same-sex bonds through romance, strong same-sex intimacy in settings that did not conflict with heterosexual norms, and the relativization of the deviant view of “female homosexuality”.

1 問題関心

我々の多くは、少女漫画といえば異性との恋愛を連想するだろう。しかし、少女漫画と女子・女性間の友情の関連を思い起こすのは、恋愛の場合より困難ではなかろうか。事実、恋愛が少女漫画の重要なテーマである一方、「友情は少年漫画の主要なテーマだが、少女漫画ではそうではない」^{p1}のだ。しかし、これは考えてみれば不思議なことである。少年漫画では友情が重要なテーマであるにも関わらず、また少女漫画は主に女性を作家とし女子を読者とし女子の物語を描くにも関わらず、一体何故、少女漫画では同性間の親密性は重要とならないのだろうか。（以下「同性間」と記す時、女子ないし女性同士に限定する）

ジェンダー研究では、メディアにおける異性愛の称揚と同性間の親密性の不在は、異性愛規範の強制や再生産の問題として論じられてきた。古くはアドリエヌ・リッチが、男性権力が「女に異性愛を強制」^{p2}する例に「芸術、文学、メディア、広告における異性愛ロマンスの美化」^{p3}を挙げ、また東園子はリッチの議論を踏まえ、異性愛の強制に伴い女性同士の親密性は社会において周縁化・矮小化されている^{p4}ため、女性同士の親密性を表現する社会的な認識の枠組みは弱く、故に女性の友情物語が少ない^{p5}と論じる。一方で、異性愛規範内で紡がれる「女同士の絆」の可能性をメディアの中に見出そうとする研究も生まれており、異性愛規範に抑圧されるだけではない同性間の親密性の在り方が模索されてもいる^{p6}。

そこで本稿では、ジェンダー研究が指摘するような状況が少女漫画で如何に生じ、その中で同性間の親密性が如何に扱われたかの検討を目的に、異性愛が拡大・定着した時期の少女漫画を分析する。少女漫画は1950年代以降に少女文化^{p7}で隆盛するが、後述するように、当初は異性愛はタブーとされ、1960年代に異性愛の描写が探り探り拡大していった^{p8}のであり、更に言えば戦前の少女文化では同性間の親密性が称揚されてすらいた。故に、少女漫画における同性間の親密性を考えるには、異性愛の描写が出現する過渡期を検討することが必要だ。

少女漫画において異性愛が出現・定着する過程は、後に検討するように、異性愛が規範化される過程でもあった。そして大人が女子に送る少女メディアという特性上、そこでは社会的に「正しい」規範が反映され、読者に伝達される側面も確かにあった。しかし少女メディアは単なる規範への従属だけでなく、規範への抵抗の側面を示すものでもあり続けてきた⁹。少女漫画における異性愛の導入も、異性愛描写をタブーとする旧来的規範への挑戦から生まれてきたものだ。加えて、赤枝香奈子が指摘するように、「女性同士の親密性という領域」は、「女性のセクシュアリティをコントロールしつつ、女性同士の親密性を規制しよう」とする「当該社会における「正しい」ジェンダーやセクシュアリティ」に対し、それを「踏み越えるような実践」を生み、「抵抗や解放、創造の源泉ともなる可能性」を秘めた領域でもある¹⁰。少女漫画において異性愛が規範化される中でも、同性間の親密性がただ異性愛規範のジェンダー秩序に則り周縁化・矮小化されるだけではない表象も生まれていたのではなかろうか。そこに我々は、異性愛規範の中における「女同士の絆」の表象可能性の手掛りを見出すことができるのではなかろうか。

改めて整理する。本稿では、少女漫画における同性間の親密性が、少女漫画に異性愛が出現・定着する過程において、ジェンダー規範と如何に関わり、如何に位置づけられるようになったかを検討する。以降、2節で先行研究から本稿の分析視角と意義を提示し、3節で分析の概要を示す。それをもとに4節では、少女漫画に異性愛が出現する過程における同性間の親密性を、旧来的少女文化との関連から論じる。5節では異性愛の描写が既に定着した時期における同性間の親密性を、異性愛規範との関連から論じる。

2 少女文化における同性間 / 異性間の親密性

2-1 戦前の少女文化と同性間の親密性

議論の出発点として、1節でも言及した東園子を参照する。東は近代社会において女性を巡る「親密性のコード」、即ち親密性に関する社会的な認識の枠組みがいかに編成されているかについて、先述のリッチの「強制的異性愛」、セジュウィック¹¹の「男同士のホモソーシャルな絆」やルーマン¹²の議論から理論的に論じた。東によれば、男性ホモソーシャルリティを中心とし異性愛規範が働く近代社会では、女性が異性愛者と認識されれば異性愛の追求が第一とされて同性間の親密性は劣位化され、また女性同士の交流に性的要素が認識されれば

それは「同性愛」と見なされ強制的異性愛に基づき逸脱視される^{▶13}。そして東は、女性同士の親密性を描く物語が少ないのは、上記の状況ゆえに女性同士の親密性を捉える「親密性のコード」が発達していないためだと指摘する^{▶14}。

東は、近代日本での女性を巡る「親密性のコード」の編成過程を、戦前の女学生同士の親密な関係に関連づける^{▶15}。ここで言及される親密な関係とは、「sisterの頭文字であり、女学校の上級生と下級生の間などに見られた親密な関係を姉妹に例えて読んだ表現」^{▶16}である、「S」^{▶17}と呼ばれる女学生文化だ。赤枝によれば、1910年代に西洋性科学に基づき〈同性愛〉として危険視された女学生の親密性を女性作家が擁護する上で、その親密性が肉欲から切り離されて精神性が強調された。そうして同性間の親密性はSとして位置づけ直され、将来の良妻賢母規範と矛盾しない一時的な〈仮の同性愛〉として社会的にも認められたという^{▶18}。東はここに、性的要素の不在と将来的な結婚の下で許容された同性間の親密性という、女性を巡る「親密性のコード」の現れを指摘している。しかし東の指摘には、Sの背景には一方で「少女」を異性愛から離そうとする規範も働いていたことが欠けている。戦前の「少女」にとっての異性愛とは、将来に良妻賢母になることであり、「少女」時代での異性との交際は「純潔」規範に基づき避けるべきとされていた^{▶19}のである。

今田絵里香は、当時の少女雑誌が異性との親密性を扱わなかった^{▶20}一方、同性間の親密性についてはS関係を描いた吉屋信子『花物語』やそれに続く「友情小説」が「当時の少女たちの絶大な支持を獲得」^{▶21}し、Sが「女学生なら当然おこなうべき交際の形態として描写」^{▶22}されたと指摘し、それが「女子に慎みを与え、純潔であることを尊ばせる」という「清純主義」^{▶23}を基盤としており、「エスという関係にもまさにそれが当てはめられてい」た^{▶24}と論じている。東の理論的整理は重要であるが、その立場からのみ少女文化を語ることはできない。むしろ少女文化を論じるには、東の議論の裏側にある、戦前の少女雑誌では異性愛規範の枠内という限界を抱えつつも異性愛が制限され、同性間の親密性を積極的に描いていた、という面に注目する必要がある。^{▶25}

2-2 少女漫画におけるジェンダー規範の転換

本稿でこの側面を強調するのは、戦後の少女漫画が戦前の少女文化に由来する旧来的規範から出発したからである。

少女小説雑誌研究では、戦後の比較的早期に雑誌が価値転換を行ったと指摘されている^{▶26}。今田は1950～1960年代の『少女の友』『女学生の友』を分析し、

異性との親密性を描く小説が増加する一方、S関係の描写が限定的で²⁷、同性の友人関係の描写も減少していくことを量的に示した²⁸上で、誌面がSをセンチメンタルなものとして否定・男女交際を明朗なものとして肯定し、「エスから異性愛へ、センチメンタルから明朗へ」²⁹という価値転換を遂げたと整理する。また赤枝によれば社会的にも戦後、性解放や新たな性科学知識の流入により戦前からのSの論理は失われ、代わって「レズビアン」という外来語が大人の肉体的関係としての女性同性愛を指すようになった³⁰。

一方で、戦後に少女文化における重要性を増していく少女漫画では³¹、少女小説雑誌が旧来の少女文化の規範性から転換していく1950年代～1960年代初期においても、依然として旧来的少女文化の規範性に縛られていた。押山美知子が整理するように、当時の少女漫画の主な書き手が少女文化に明るくない男性漫画家だったために既存の少女小説が模範とされ、また「悪書追放運動」³²の中で漫画がバッシングされたために、物語内容及び「少女」像の保守化と画一化が生じていたのだ³³。また秦美香子も、当時は漫画は子供が読むものとされ、出版社側が異性愛の描写を自主規制していたという関係者の語り³⁴に、「少女」は異性愛に関わるべきでないという戦前の規範との連続性を指摘する³⁵。一方で同性間の親密性については、米沢嘉博が初期の少女漫画の主題の1つとして「友情」を挙げている³⁶ほか、貸本少女漫画においてSを描いた作品の存在も指摘されており³⁷、当時の少女漫画の1つのテーマだったといえる。

そのため、少女漫画が1960年代に異性愛を導入する際、旧来の少女文化の規範との葛藤が生じた。「それを「少女」自身が経験するものとして描くためには、明治期以来の「少女」に対する規範的言説をくつがえすことが必要になる」³⁸からだ。その導入の様相は米沢嘉博『戦後少女マンガ史』³⁹など多くの記述があるため本稿では触れないが、ここでは旧来的規範と異性愛の葛藤に注目した研究として、秦の議論を確認しておく。秦は「少女」の恋愛を描く過渡期的作品として、『なかよし』で「主人公の恋愛」を先駆的に描いた媒図かずお「ロマンスの葉」(1966～7)に注目し、そこでは同性集団への帰属を自明のものとしつつ、その上で恋愛が異性集団との「遊び」として描かれることで、「純潔」規範を維持しつつ恋愛描写が可能になったと指摘している⁴⁰。これは、少女漫画が異性との親密性と旧来的少女文化との葛藤をやりすごす戦術の1つとして、同性間の親密性が用いられたことを示唆している。

しかし一方で1970年頃になると、既に「異性愛文化が主要な文化として少女雑誌文化に定着」⁴¹した。それにより、ジェンダー規範を巡る葛藤も異なる様

相を示し始めたことが、藤本由香里の議論から伺える。藤本は1970年代初期から少女漫画に「レズビアンもの」が登場し、それらの作品がいずれも悲劇に終わることを論じた⁴²。藤本はそこに、「近代ロマンチックラブイデオロギー」において女性が男性と「つがわなければ」ならず、「女はそれ自身では価値がない」のだという「脅迫」の存在を読み取っている⁴³のである。この指摘に現れているのは、秦の論じる旧来的少女文化と異性間の親密性の葛藤ではなく、東の論じる、異性愛規範と同性間の親密性の葛藤である。

このように少女漫画においては、1960年代初期から1970年代初期の間に、異性愛を制限し同性間の親密性を称揚する旧来的少女文化のジェンダー規範から、異性との親密性を称揚し同性間の親密性を制限する異性愛規範へ、という、異なる2つのジェンダー規範の間での価値転換が生じている。また先行研究の指摘からは、同性間の親密性の扱いがこの間に大きく変化したことが想定できる。従って、少女漫画における同性間の親密性を考える際、少女漫画に異性愛が導入されたこの時期において、旧来的少女文化と異性愛規範という2点を踏まえながら、同性間の親密性の表象を通時的に検討し、その背景にどのような規範の反映があったかを考察する必要がある。

3 分析の対象と方法

本稿では分析対象を『週刊少女フレンド』（講談社、以下『フレンド』）1963～72年度⁴⁴掲載の漫画作品とする。

石子順造が1960年代の少女漫画について「『フレンド』と『マーガレット』とが少女誌の主流とな」った⁴⁵と語るように、当時は週刊の少女漫画雑誌として『フレンド』と『週刊マーガレット』（集英社、以下『マーガレット』）が登場し、この2誌が少女漫画の流れを形成していった。創刊当時の両誌について、石子は「明らかに後者のほうが流れを一步先行し」、前者は「まだ旧来の子どもマンガ一般のスタイルを抜けきっていな」かった⁴⁶と評しており、また当時の編集者も、『フレンド』は「悪書追放運動」の影響もあり親や識者の眼を強く意識していた⁴⁷が、『マーガレット』は先発の『フレンド』に対抗し、「タブーだった」恋愛要素に「敢えて挑戦し」た⁴⁸と語っている。そのため少女漫画における恋愛の前面化を歴史的に跡付ける先行研究では『マーガレット』が参照される頻度が最も高い⁴⁹。しかし、旧来的少女文化からの変化を分析視角の1つとして同性間の親密性の表象を検討する本稿においては、同じく主流でありつつ、より旧来

表1 分析対象となる作品数と人間関係

対象作品/年	1963年	1964年	1965年	1966年	1967年	1968年	1969年	1970年	1971年	1972年	合計
全作品数	16	28	61	58	68	67	66	83	148	132	727
同性間の親密性が登場する作品数	10	13	17	16	16	27	20	21	28	32	200
同性間の親密性の組の数	19	16	23	20	20	32	22	32	33	35	252
(参考)全読切作品数	1	11	36	27	21	32	17	37	116	98	396
(参考)全連載作品数	15	17	25	31	47	35	49	46	32	34	331

表2 同性間の親密性の分類

主題	主人公との親密性をもち、人間関係がストーリーの主題として描かれる人物
友人・仲間	主人公との親密性をもち、人間関係が、主題ではないが、継続的に描かれる人物
男女集団	主人公と共に行動する男女集団の一員として、人間関係が継続的に描かれる人物
援助①	男性の助力なしで、何らかの問題状況に際し、主人公に助けられたり、主人公を助けたりする人物
援助②	男性の助力ありで、何らかの問題状況に際し、主人公に助けられたり、主人公を助けたりする人物
援助③	男女関係に際し、主人公に助けられたり、主人公を助けたりする人物
和解①	主人公との、男女関係以外での敵対関係が解消され、親密性が表明される人物
和解②	主人公との、男女関係での三角関係や、嫉妬による問題状況が解消され、親密性が表明される人物
敵対①	男女関係以外で、主人公と敵対する人物。表面上のみ仲が良い、亀裂が生じ和解がなされないなど。
敵対②	男女関係で、主人公と敵対する人物。表面上のみ仲が良い、三角関係が生じ和解がなされないなど。
好敵手①	恋愛漫画において、主人公と目標の追求を通して対立しつつも認めあう人物
好敵手②	スポーツ漫画において、主人公と目標の追求を通して対立しつつも認めあう人物
好敵手③	その他のテーマの漫画において、主人公と目標の追求を通して対立しつつも認めあう人物
先達	恋愛・性愛を経験した存在として、恋愛・性愛に疎い主人公に、何らかの気付きを与える人物
契機	主人公との人間関係を通して、ストーリーの主題や次の展開のきっかけとなる人物
ホラー	ホラー漫画で描かれる人物
ギャグ	ギャグ漫画で描かれる人物
その他	ストーリーの展開に関与しない、一瞬しか登場しないなど

的少女文化に根差していた『フレンド』を対象とするのが、当時の雑誌の影響力、また変化を明瞭に捉えるという観点からも相応しい。

分析の時期に関して、宮台真司の議論を参照する。宮台は、少女文化が異性との親密性を導入したことに、「戦前的な「性から隔離された身体」としての〈少女〉」の「消失」という、戦前と戦後の断絶を指摘した⁵⁰。そこでは戦前的な「清く正しく美しい」少女像の時期が「明治末～1950年代」⁵¹、そこからの転換の時期が「1955～72年」⁵²とされている。本稿ではこれに依拠し、始点は『フレンド』が創刊した1963年1号、終点は1972年末(52号)とした。

分析にあたり『フレンド』1963～72年分を通読し内容を確認した⁵³。そして同性間の親密性として、漫画作品において「女子/女性として表象されるストーリーの中心人物」と、「女子/女性として表象され、固有名を持ち、ストーリーで彼女と関わりを持つ人物」に注目⁵⁴し、作中のテキストと編集で付されたテクス

表3 同性間の親密性の出現回数

	1963年	1964年	1965年	1966年	1967年	1968年	1969年	1970年	1971年	1972年	合計
主題	2	2	3	3	1	6	2		3	2	24
友人・仲間	1	3	2	2	5	6	4	6	10	5	44
男女集団					3	3		1	1	1	9
援助①	6	5	4	2	3	3		1	4	2	30
援助②				3	2	1					6
援助③						1		2	3	2	8
和解①	4	2	4		1	1		1		1	14
和解②				1		3	6	3		1	14
敵対①						1	1	1	1	2	6
敵対②						1		3		1	5
好敵手①							3			1	4
好敵手②							2	2	2		6
好敵手③								1	1		2
先達								2	1	4	7
契機	5	2	4	1	2	2		1	2	2	21
ホラー			3	4	1	3		2	4	7	24
ギャグ		1	1	1	1	1	1	5		1	12
その他	1	1	2	3	1		3	1	1	3	16
合計	19	16	23	20	20	32	22	32	33	35	252

トにて、文字情報で親密性が示される組や集団の数を記録した⁵⁵⁾。対象となる作品数と、同性間の親密性が登場する作品数とその組の数を【表1】に示す⁵⁶⁾。なお、母娘、姉妹などの家族関係は本稿では除外している。そして、取り出した人間関係を内容に基づき分類し【表2】、年ごとの登場数を記録した⁵⁷⁾【表3】。また分類とは別に、作品や人間関係の表象の具体的内容、そこに表れるモチーフやプロット等も、個々の作品毎に記録した。

作品群を概観すると、後に論じるように、1968年頃を境にしてそれ以前を旧来的少女文化の反映とそこからの離脱の時期、それ以降を異性愛の定着・規範化の時期として捉えられる。以降、同性間の親密性を、4節で旧来的少女文化との関連、5節で異性愛の規範化との関連から論じる。

4 同性間の親密性と少女文化の変化の関連

まず『フレンド』に描かれた同性間の親密性を、旧来的少女文化との関連から論じる。結論を先取りすると同性間の親密性は、旧来的少女文化からの価値転換が進むにつれて、それに支えられた価値づけを失っていき、次第に既に与

えられた身近なものとして描かれることが多くなった。

4-1 旧来的少女文化の反映

まず、1960年代前半における同性間の親密性には、戦前の少女文化や1950年代の少女漫画における価値観との共通性が見られ、旧来的少女文化が反映されていたといえる。

1963～65年には、【表3】にて〈援助①〉〈和解①〉が集中して見られるように、「女子が女子を助ける」話や「女子が女子と和解する」話が多く描かれており、その中では女子の抱える困難が強調される傾向にあった。前者の例として生田直親・細川知栄子「なくなパリっ子」^{p58}では、パリから日本へ生き別れの父を探しに来た女子が、同じく親のない勤労少女と姉妹的な絆を結び、次々と起こる互いの困難に際し助け合う【図1】。また後者の例として藤木靖子・中島利行「カナリヤ少女」^{p59}では、貧しい主人公が意地悪な大家の娘に虐められるが、大家の娘が病に倒れた際、主人公が徹夜で看病し、娘は主人公の優しさにより改心する。このように、不遇な境遇にあっても優しさを忘れず、その優しさにより問題を解決する女子の姿と、その中で結ばれる絆が、この時期には頻出していた。また、同性間の親密性が〈主題〉として描かれるものや、ストーリーを進める〈契機〉となるものも多い。〈契機〉では、やはり主人公の優しさによる問題解決に繋がる人間関係が多く描かれる他、貧乏な主人公と裕福な娘という対比も複数登場していた。また〈主題〉としては、外国と繋がりのある女子と日本の女子の出会い、病気の女子との出会いと死別、転校生との出会いが描かれており、こうしたモチーフは他の類型にも広く見られた。

ここから、この時期の親密性の表象の特徴として、第一に「少女の優しさ」の強調、第二に「外国」「貧富」「病」というモチーフを指摘でき、これは旧来的な少女文化との共通性を有するものである。戦前の少女文化の特徴として宮台は、「普通ではありえないような苦難を〈代理体験〉し、その克服によるカタルシスを享受することにおいて、『清く正しく美しく』という〈理想〉を享受」^{p60}させることを指摘しているが、助け合いや和解、また死別の物語は、こうした指摘と展開や理想像の上で共通している。また今田も、戦前の『少女の友』では一貫して「少女が少女を助ける」ことが理想的行動として描かれてきたと指摘している^{p61}。加えて、貸本少女漫画や初期の週刊少女漫画雑誌の特徴として米沢は、「貧乏な少女が金持ちの養女になる」などの物質主義的な憧れ^{p62}や、「外国へのあこがれ」^{p63}を挙げており、「外国」や「貧富」というモチーフは、

異性愛が中心化する以前の少女漫画における憧れが反映されたものといえる。

当時『フレンド』は旧来的少女文化の価値観に準拠していたが、そこで示される規範的な「少女」像や「あこがれ」が同性間の親密性にも現れており、結果として同性間の親密性は物語において強調される、価値づけられた関係として描かれていたと整理できるだろう。なお、1964年から外国を主な舞台として男女の恋愛の親密性を描く作品が散見される⁶⁴が、そうした物語では同性間の関係は親子、主従、三角関係⁶⁵等が主であり、本稿で対象とした親密性はほぼ登場しなかった。



図1
女子同士の助け合い(生田直親・細川知栄子
「なくなパリっ子」『週刊少女フレンド』1963
年49号 p.46)

4-2 旧来的少女文化の脱色

1966～67年になると、米沢の指摘にもある⁶⁶ように、外国を舞台に男女の恋愛を描く作品、および学園を舞台として男女交際などを描く作品が増加しつつあった。しかし、異性との親密性を主題とする物語での同性同士の関係は、依然として親子や三角関係等が主であり、本稿で対象とした親密性は少なかった。

一方で、【表3】の〈援助①〉〈和解①〉が減少しているように、この時期には1965年まで頻出していた「優しさにより問題を解決する女子」が描かれることが減り、代わって助け合いに男性の助力が介入する〈援助②〉や、〈男女集団〉として目標達成や問題解決に取り組む描写が見られた。例えば、西谷康二・花村えい子「青い髪の少年」⁶⁷では、病気の女子が不思議な力を持つ男子の力を借りて女子の問題を解決する話が描かれ、横山まさみち「ああ青春(第一部)」⁶⁸では、夜間高校に通う女子が男女集団の協力で不良の少女を更生させる話が描かれる。これは既存の「女子を助ける女子」展開の派生形としての、「『女子を助ける女子』を助ける男子」ないし「女子を含めて助け合う男女」という形での男女交際の導入といえる。2節で言及した秦の、楳図かずお『ロマンスの薬』(1966～7)が同性間の親密性を土台に恋愛を描いていた、とする指摘も踏まえる

と、これは旧来的少女文化と男女交際の葛藤と折衝として捉えられよう。

またこの折衝は、同性間の親密性を〈主題〉とする1966年の3組にも表れている。今村ゆたか「アイ・アム・デコ」^{▷69}の2エピソード、及び竹中きよこ「しびれのピーくん」^{▷70}の1エピソードは、いずれも主人公と年上の女性への/年下の女子からの思慕が描かれ、前者の作品では「おねえさま」呼びも伴う。しかし前者では連載において継続して主人公と「ボーイフレンド」との交流が描かれ、後者では主人公が憧れの女性と主人公の父親との再婚を画策する話であり、ともに異性との親密性の内容も描かれていた。

プロットやモチーフに注目すると、貧しい女子や病の女子は引き続き登場するが、「外国の女子と日本の女子が出会い、友情を結ぶ」話が描かれなくなっていた。また、1965年までは「出会い」によりもたらされる親密性が多く描かれた一方、1966～67年になると、学園ものにおける同級生など、「既に友人である」という関係が増えていた。それは主人公を〈援助〉したり、主題となる事柄の〈契機〉となったりという物語上の役割を担う場合もあるが、ただ存在が示されるのみで物語に介入しない〈その他〉の登場人物^{▷71}や、主人公と行動や目標を共にする、読者の交友関係に近いと思われる〈友人・仲間〉としても表象されていた。なおこのような所与の親密性の描写は、1968年以降も継続して登場している^{▷72}。加えて、「出会い」の類型でも、学園ものにおける「転校生と在校生」の友情が目立つようになっていた。

この時期、『フレンド』において異性との親密性が中心化しつつあり、旧来的少女文化の規範性に基づく価値観からの転換が試みられていた。その中で同性間の親密性においては、旧来的少女文化と男女交際というテーマの折衝が顕在化する一方で、旧来的少女文化に支えられていた価値が脱色されたため、「外国」と結びついた憧れや劇的な「出会い」が見られなくなり、「旧友」「同級生」「転校生と在校生」という、主人公にとっても読者にとってもより身近な友情が描かれるようになった、と整理できる。

4-3 異性愛の定着と身近な友情

1968年以降になると、『フレンド』でも外国のハイスクールや日本の学園を舞台にした男女交際が数多く描かれるようになり、異性との親密性が重要なテーマとして定着したといえる。一方で同性間の親密性は引き続き、主人公と行動や目的を共にする近しい〈友人・仲間〉として描写されるケースが多い。そうした中で1968年より新たに、同性間の親密性に三角関係が介入する描写が出

現していた。先述の通り三角関係の描写自体は1964年から存在するが、男を巡る女2人に親密性は描かれなかった。だが1968年以降、友人と三角関係になるが後に和解する、あるいは三角関係が解消されて初めて友人になるといった〈和解②〉の関係が増加するほか、友人と三角関係になり和解がなされないという〈敵対②〉の関係もみられた。【図2】



図2
友情と三角関係の衝突（大和和紀「0083は恋のナンバー」『週刊少女フレンド』1969年29号 p.135）

そして1970年以降、主人公とその〈友人・仲間〉とが、同性間の親密性を維持しつつ個別に異性との恋愛を行うという結びつきが描かれ始めていた。そこでは友人は、主人公の恋愛対象とは別の恋愛対象がいたり、主人公の恋愛対象と血縁関係にあったりと、主人公と三角関係にならない位置にいることが多く、その中で主人公と恋愛相談をしたり恋愛の話題を共有したりする様が描写される。また、主人公の恋愛成就を援助する友人（〈援助③〉）や、まだ恋愛を経験・自覚していない主人公に対して恋愛の〈先達〉として振る舞う友人も、1970年から描写されていた。宮台が言うように、「戦前的な「性から隔離された身体」としての〈少女〉はもう遠」くなる⁷³中で、「少女」と恋愛・性愛の結びつきが既に自明になった中で、同性間の親密性も異性との親密性の介在を前提として描写されるようになっていた⁷⁴。

一方で、主題化される同性間の親密性にも変化が見られる。1966年までは旧友や同級生の友情は〈主題〉として描かれず、転校生の物語も2作のみだった。しかし、1967年の同級生間の友情を描いた1組を経て、1968年には友情物語が5作掲載され、いずれも旧友・同級生・転校生との友情を描いていた。そこでは病や死別が描かれる場合もあるが、外国対日本というモチーフはやはり登場しない。例として、細野みち子「友情詩集 ゆびきり」⁷⁵を挙げる。主人公と友人は冒頭から昔からの親友として描かれるが、ある事件がきっかけで仲違いする。その後主人公は病の少女と出会って友達になり、友情とは壊さないようにに努力することが必要なものだ、と彼女に諭される。そして結末にて主人公は



図3
「友情詩集 ゆびきり」における友情賛美（細野
みち子、『週刊少女フレンド』1968年19号 p.61）

病の少女と死別して友情の重さを実感し、仲違いした友人とも仲直りする。この物語では、1項で論じた「病による死別」を介し、2項で論じた「身近な友情」が、改めて価値づけ直されるのである【図3】。こうした身近な友情を主題に置いた物語は、1969、71、72年にも登場していた。

この身近な友情の主題化に関し、1968年の『フレンド』に転校生と在校生の友情物語「はじめての涙」⁷⁶を掲載した巴里夫の語りが参考になる。巴は貸本漫画でデビューし、最初は旧来的少女文化の反映といえる、「吉屋信子」的な「母恋し、つつましやかなレズ、上流意識等と

いった「型」による「泣かせ」の構成・演出を描いていた。それが代わって「子供の生活感情をリアルにデリケートに汲み取り、デフォルメなしの、現実感そのもののギャグ」を描き始めると「読者に好評で」、「どうして私たちの気持ち分かるの?」という声が届いたという⁷⁷。ここからは、当時の読者にとって、「現実感」を重視した物語が、共感を呼ぶ魅力的なものとして捉えられていた様が伺える。これを踏まえると、同性間の親密性は「カタルシス」や「あこがれ」といった旧来的少女文化に支えられた価値を失い身近な友情として描かれるようになったが、そうした身近な友情に、読者が自分事として捉え共感できる等身大の現実、という新たな魅力が見出されていたと整理できる。

以上、同性間の親密性と旧来的少女文化の関連を総括する。『フレンド』は1960年代前半では旧来的少女文化に依拠し、同性間の親密性もそれにより価値づけられていた。それが1960年代中頃に旧来的少女文化からの価値転換が生じ、同性間の親密性から既存の価値づけが失われ、主人公に近い所与の関係として描写されることが増えた。そして1960年代末以降、異性愛の要素が定着すると、同性間の親密性は異性愛の物語の周縁に置かれる一方で、身近な関係として表象されるからこそ、読者の共感の対象としての新たな価値が見出されていた⁷⁸。

5 異性愛の規範化とジェンダー秩序の反映 / 回避

前節では1960年代の『フレンド』が旧来的少女文化から出発し、価値観の転換に伴い異性愛が描かれていく中で、同性間の親密性の描写が変化していく様を確認した。これを踏まえて5節では、第一に、異性愛が雑誌により積極的に「規範」化されてもいた側面と、その中で同性間の親密性が果たした役割を論じる。第二に、そうした規範化された異性愛の中における同性間の親密性の表象を、「親密性のコード」の議論に照合させて論じる。第三に、1970年以降に少女雑誌に登場する「女性同性愛」的親密性⁷⁹を、『フレンド』以外の言説も参照して論じる。

5-1 異性愛の規範化の過程

まず、1970年前後になると、異性愛は単に描かれたのみならず、それが「規範」化されてもいたことを、愛や性への深い問題意識を持った作品を題材に示す。当時そうした問題意識が登場したことは様々に指摘があり、例えば米沢は、愛や性への「問題意識を持ったリアリズム指向の作品」を様々な作品を挙げて指摘し、それが「描き手」の表現の追求であり、「それまでの「少女マンガ」にある意味では否定」するものだったとまで述べる⁸⁰。この点に関し本稿では、むしろこれが雑誌の戦略でもあり、異性愛が「正しい」セクシュアリティであるという前提の上で読者に愛や性の問題を考えさせようとしていたことを指摘する。その上で、同性間の親密性が愛や性の問題を考える手掛りを与えていたことを論じる。

5-1-1 雑誌主導の問題意識の追究

1960年代末より『フレンド』は、「シリーズ」企画として1つのテーマに沿った複数の作品を掲載する試みを行っていた。そこでは、愛や性の問題を扱った漫画群も繰り返し「シリーズ」化され、多くの作品が掲載されていた。例えば1969年「十代の問題シリーズ」、1970年「アバンチュールシリーズ」、1971年「危険なまがり角シリーズ」などである【図4】。「シリーズ」の枠組みを持ったこれらの作品の掲載は、愛や性の問題の追求が描き手によってのみもたらされたのではなく、編集者が企画し主導してもいたことを示している。注目すべきは第一に、そこでは例えば「不良」や「プレイボーイ/ガール」を否定的に描くなどにより、愛や性に対する「態度」が焦点化されたのであって、「少女」が愛や性に関する経験をすること自体は否定されないという点であり、やはり「少女」



図 4
「十代の問題シリーズ」の例（松本香鶴・北条なみえ「まちがいキッス」『週刊少女フレンド』1969年33号p.71）

は「恋愛」に開かれていた。

そして第二に、そこではしばしば、「この物語の主人公はあなた自身です」^{▷81}等の言葉で、物語が読者と結び付けられていた点である。これは「シリーズ」でない作品でも見られる。例えば『フレンド』の長期連載として初めて主人公の恋愛－結婚－出産というライフコースを描いた里中満智子「レディーアン」^{▷82}では、序盤は「デザイナーをゆめ見るお針子アンのけっさくコメディー」^{▷83}等と銘打たれるが、終盤には主人公の流産、主人公の夫の不倫、友人の夫婦関係に起因する自殺未遂等の問題が描かれ、そこでは「愛ってなに？ 愛のよろこび・かなしみ・くるしみを華麗なファッションの世界にえがく本格感動ドラマ！あなたもいっしょに考えてください！」^{▷84}という

アオリ文が付されていた。編集者の言葉で、「愛」の問題を扱う作品だと示されつつ、読者にそれを「いっしょに考え」るよう促すのである。

少女雑誌による愛や性の問題の追求、および読者との結び付きについて、少女小説研究では今田絵里香の指摘がある。今田は性愛を扱った60年代の「ジュニア小説」について、それが雑誌の方針として、女子に性に関する知識と、性に関する選択権を獲得させたうえで、「純愛」規範を維持させる狙いがあったと論じる^{▷85}。これを踏まえると、少女漫画雑誌において、愛や性の問題の追求を編集者が「シリーズ」企画として主導したり、そうした作品に編集者が「あなたもいっしょに考えてください！」と添えたりする手法からは、愛や性に関する態度を読者に考えさせるという教育的機能が雑誌によって積極的に仕掛けられていたことが伺える。あるいは教育的機能をカモフラージュに用いて、旧来的「少女」像に拠る大人達から作品への批判を避ける狙いもあったのかもしれない^{▷86}。いずれにせよそうした積極的戦略は、女子は異性愛に開かれ

ており、異性愛は「正しい」セクシュアリティであるという、異性愛を規範化する振る舞いとなっていることは言うまでもない。

5-1-2 同性の他者を介した愛や性の自覚

以上を踏まえ、そこにおける同性間の親密性の役割を論じる。そもそも少女漫画において「少女」である主人公の恋愛が描写されるに至る過程には、同性の他者の恋愛による媒介が存在してきた。藤本由香里は少女漫画における恋愛描写の導入に、主人公の「姉」が「先達の役割を果たす」物語を指摘し、ここでは姉の「婚約」により主人公の「私はまだ子供のね」という反省と「はやく素敵なおレディになりたい」という願望が表明される、と論じた⁸⁷。ここでは「少女」である時点での異性愛が抑制される⁸⁸一方で、姉のように自分も恋愛し結婚するのだという「近い将来必ずそうなるとする予言として、「少女」の性的身体性が「予約」されて」もあり、それは読者にとっても「わがことのように応援する、それなりに身近なものとして機能していた」⁸⁹。日高利泰は「姉」の恋愛や結婚という手法が1960年に既に出現し、1965年以前には一般化したと指摘している⁹⁰が、『フレンド』ではやや遅く1965年より、姉の恋愛や結婚の描写が登場していた⁹¹。少女漫画に恋愛が導入される過渡期の戦略として、「大人」の姉と「子ども」の主人公を区別し主人公の恋愛を抑制しつつ、主人公および読者に恋愛や結婚を意識させるという手法がとられていたといえる。

これが1969年の『フレンド』の「シリーズ」企画では、恋愛経験者の同級生とまだ「子ども」の主人公という対比となる。一ノ木アヤ・大和和紀「初恋宣言！」⁹²では、修道院育ちで恋愛経験がなく同級生達から「お子さま」と揶揄われる主人公が、同級生の1人とキャンプに行き、彼女と青年とのキスを見て男女の愛に感銘を受け、自身も初恋をする物語であり【図5】、結末にはコマの外に「さあ、あなたも、マリアに負けない、すてきな恋をキャッチしてね」⁹³という言葉が記されている。時代の進んだ「初恋宣言！」をかつての「姉」と比べると、主人公と対比される人物が主人公と同年代であり、「少女」も恋愛に開かれた存在であり、「あなた」＝読者と作品の内容が結び付けられたうえで恋愛が称揚されており、ここに先述した教育的機能と異性愛の規範化が読みとれる。

そして1970年以降、この構図に、主人公と同性の他者の距離の接近と、愛や性の問題意識の深化が生じていた。例として嶋中隆子・大和和紀「真由子の日記」⁹⁴を挙げる。大塚英志が「妊娠や初潮と言った性的身体が主題となったはじめての作品」と指摘する⁹⁵この作品では、「おとなになりつつある」⁹⁶主



図 5
「初恋宣言!」での愛の気づき (一ノ木アヤ・大和和紀、
『週刊少女フレンド』1969年34号 p.233)

人公が様々な経験を経て大人になることを内省する様が描かれるが、その中では同性の友人が大きな役割を果たしている。主人公は「もうかんぜんなおとなのように見える」^{▷97} 同級生と「ほんもののしんけんな友情」^{▷98} を結ぶのだが、彼女が教師と男女の交際をし、妊娠し、自殺したことを知るのである。そしてこの物語は、予告を「???の日記」と掲載して主人公の名前を読者から募集するという企画がなされ^{▷99}、作中でも編集者の言葉で繰り返し主人公が「あなた自身」であることが強調

^{▷100} されているように、先述した読者と作品の繋がりも強く意識されていた。そして「真由子の日記」以降も、主人公に近い恋愛の〈先達〉や、主人公と同時並行で恋愛する〈友人・仲間〉の愛や性に関する幸福やトラブルを通して、主人公が自らの愛や性の問題を考える、という作品が見られた。

以上の論点を纏める。少女漫画で恋愛の問題を扱う際の手法として「同性の他者の恋愛による媒介」というものがあった。主人公および読者女子にとって、「同性の他者」の経験は「わがこと」として捉えられるからである。そして少女漫画に恋愛が定着し、「少女」に恋愛が開かれると、やがて主人公と同年代の近い人間における愛や性の経験を通して主人公が愛や性について考える物語が登場した。その背後には、「正しい」セクシュアリティとしての異性愛に伴う愛や性への態度を読者に考えさせようという雑誌側の教育上の意図が想定でき、これは少女漫画において異性愛が規範化されたことを示している。そして、そうした物語内において同性間の親密性は、主人公の身近な存在として描かれること、及び主人公に読者が自発的にあるいは編集者の誘導で自身を重ねることにより、読者にそのような問題を考えるきっかけを与えていた。愛や性に関

わる深刻な問題は必ずしも読者の「等身大の現実」ではないが、自身の「性的身体」にも起こりうる「わがこと」として捉えられるが故に、読者は主人公と共に愛や性の問題を考えるのである。

5-2 異性愛規範の中での同性間の親密性

次に、こうして異性愛が規範化された中での『フレンド』における同性間の親密性の位置づけを、2節で参照した「親密性のコード」の議論に照らし合わせて検討する。

5-2-1 同性間の親密性の劣位化・逸脱視

4節では、『フレンド』で異性との親密性が主題化され始めると、同性間の親密性は身近なものとして表象されることが多くなったと指摘した。また1968年に友情と三角関係の衝突が、1970年に恋愛の介在を自明のものとした友情描写が登場したことを確認した。そして本節で論じるように、1970年以降には同性間の親密性を否定的に表象する例が登場しており、ここにおいて同性間の親密性は、異性愛規範の中における「親密性のコード」の位置づけを反映する形で描かれるようになったといえる。

まず、登場人物の台詞にて本質主義的な「女の友情」言説が語られる例が現れた。そこでは肯定的評価として「美しい」^{▶101}という形容もあるが、「こういうとき〔引用者注：ボーイフレンドができた時〕の女の子ってボーイフレンド以外にはつめたい」^{▶102}、「女の友情なんてナンセンス」^{▶103}、「そこらへんにごろごろしてる女特有のありきたりでうすっぺらでうわっつらだけの友情」^{▶104}という否定的評価の方が多く、主に男子からの批判や女子自身の自虐の言葉として登場していた。

次に、同性間の強固な親密性や性的要素の介在が、不自然さや恐怖と結び付けられたり、揶揄いや茶化しの対象となったりする例が現れた。まず、同性間の親密性を「女性同性愛」を意識して描いたと思われる作品が3例ある^{▶105}。確認できた最初の作品は永井豪「こまっチャーム」^{▶106}であり、「おねえさま」の呼称やキス、「恋」という言及を伴う女子から女子への片想いが、ギャグとして表現されていた^{▶107}【図6】。シリアスな作品では生田直親・細野みち子「造花の愛の物語」^{▶108}がある。中学生の主人公が東京宝塚歌劇の劇場で憧れの高校生の先輩と出会い、「おねえさま」として親密な関係を築く【図7】。しかし主人公に好意を向ける男子に「人間は男と女がむすばれるようにできてる それを女ど



図 6
「こまっチャーム」(永井豪、『週刊少女フレンド』
1970年3号 p.224)



図 7
「造花の愛の物語」(生田直親・細野みち子、
『週刊少女フレンド』1971年50号 p.211)



図 8
「レズ」と揶揄われる親密性
(乾東里子・朝倉じゅん「新・
ボーイハント入門」『週刊少女
フレンド』1971年12号 p.59)

うしでまにあわせようなんて それは女の臆病な心さ」¹⁰⁹と否定され、ショックを受けた主人公は先輩への思慕を断念し、宝塚を見ることもやめる。また加えて、いつも一緒にいるなど過剰と見なされる同性間の親密性が外部から「レズ」や「S」と揶揄われる描写【図8】や、ホラー漫画において女性同士のキスと恐

怖が結び付けられる描写^{▶110}も散見されるようになった。

恋愛が少女漫画に定着して以降、同性間の親密性も異性との親密性を軸に描かれるようになり、同性間の親密性それ自体は劣位なものとして言及されていた。また異性との親密性よりも強固だったり、性的要素が介入したりする同性間の親密性が逸脱的なものと見なされていた。こうした1970年頃の少女漫画における描写からは、東園子の論じた異性愛規範下のジェンダー秩序（女性が異性愛者と認識されれば異性愛の追求が第一とされて同性間の親密性が劣位化され、女性間に性的なものが認識されれば「同性愛」と見なされて逸脱視される）が、この時期から同性間の親密性に反映されるようになっていたことが指摘できる。

5-2-2 異性愛規範の隙間での強固な親密性

しかし、劣位化や逸脱視がみられない同性間の親密性も描写されていた。

第一に、スポーツ漫画では、仲間との協働やライバルとの友情という強固な親密性が描写されていた。少女漫画では1968年から1971年にかけてスポーツ漫画ブームが起こったとされ、『フレンド』でもスポーツ漫画が複数掲載されていた^{▶111}。そこではチームメイトとの協働や、ライバル（〈好敵手②〉）と認め合う等の形で、女子同士の親密性は重点的に表象されていた。一方で恋愛は必ずしも描かれているわけではなく、また恋愛が描かれる場合も、恋愛の結末が描かれるものだけではなく、スポーツによる絆に焦点が移り恋愛が棚上げされるものもあった。

ここには、一般メディアとは異なるジェンダー表象が指摘できる。近代スポーツは男女の二分を前提とし、そこでは男性身体が普遍化され、女性身体はその外部として位置づけられてきた^{▶112}。故に一般メディアでは、阿部潔が指摘するように、男性スポーツは異性愛主義を基盤とし男性を担い手とする「ホモソーシャルな関係がごく自然に、かつ強烈なまでに称賛される領域」である^{▶113}一方、「実際に存在しているにもかかわらず「女たち」は、スポーツにおける友愛の主たる担い手として表象されていない」^{▶114}。「スポーツする女たちの絆は、既存の「女らしさ」への異議や批判、また「女らしさ」からの逸脱であると同時に「男らしさ」への脅威」として受容されるからである^{▶115}。しかし少女漫画では女子スポーツに伴う女同士の絆が積極的に描かれていた。一般メディアと違い女子を読者に女子の物語を描く少女漫画では、阿部の指摘するような女子スポーツ表象とジェンダー規範との葛藤が生じにくく、故に強固な親密性を、近代スポーツという場に伴う自然なものとして描くことができたのだろう^{▶116}。

第二に、主人公も友人も恋愛をする物語では、友情が継続的に表象される傾向にあった。この場合、両者とも「異性愛者」であることが示されているため、その親密性が「同性愛」的なものとして逸脱視される余地がないのである。特に1970年以降、3人組の友人グループ^{▷117}を物語の中心とし、3人が別個に男性との親密性を獲得しつつ、友情を継続する物語が登場していた。例えば神奈幸子「ハロー CM！」^{▷118}では、主人公たち3人の「卒業以来ずっとつづけてきたこのあつまり」^{▷119}の「友情は岩よりもかたい」^{▷120}と言及され、3人でアメリカのビジネスに繰り出して協働し、最後は3人が別々の男性と結ばれて終わる。

以上2点から、同性間の強固な親密性を描く在り方のひとつとして、物語にあらかじめジェンダー規範との葛藤を回避できる同性集団を設定する手法が指摘できる。

5-3 「女性同性愛」的な親密性の論理

最後に、1970年以降に現れる「女性同性愛」的親密性と異性愛規範との関わりを論じる。注目したいのは前項にて例示したように、「レズビアン」だけでなく、「S」や「おねえさま」呼びを伴う絆や「宝塚」という、戦前の少女文化の要素も否定される点である。赤枝は1960年代の一般雑誌において「女性同性愛」が逸脱視されていく過程を論じ、その中で「S」や「宝塚」が「女性同性愛」と結びつけられた例が登場したことを指摘する^{▷121}が、1970年代の少女雑誌に同様の言説が現れたことは、戦後の少女文化における「女性同性愛」的概念の導入に戦前の少女文化が援用されていたこと、及び戦前の少女文化が1970年代には既に過去のものとしてステレオタイプ化・他者化されていた^{▷122}ことを示していよう。しかし『フレンド』、および他誌や当時の漫画家の語りも検討すると、「S」等と「レズビアン」の関連に複数性があることがわかる。

第一に、「S」を「レズビアン」と連続したセクシュアリティとして捉えつつ逸脱視する認識がみられる。『フレンド』1970年41号の記事「S関係の徹底的追求 この愛は正常か異常か！」【図9】^{▷123}では、友人への過剰なスキンシップ、友人のボーイフレンドに嫉妬する等の事例紹介と共に、「女の子たちだけでおたがいになかよくなり、愛し合う」ことが「シスターのかしら文字をとって、Sという」と紹介される。そこでは「女の子どうしがなかよくなってわるいはずはありません」とされながらも、「同性の関係もありふかくなりすぎると、かえって害がおこり」、「レズビアンなどは、こうしたSの心理状態が病的になったときにおこる状態」だとされる。この記事の「S」は戦前のSに由来する概念だろ

うが、同性間の親密性を正当なジェンダーとして「同性愛」と区別しようとする戦前の少女雑誌の論理とは異なり、「友情（正常）—S（「正常か異常か!」）—レズビアン（異常）」という連続体が提示されている。また、この論理に立脚すると思われる漫画家に、『デラックスマーガレット』1970年10月号に



図 9

「S」を論じた特集記事（「S関係の徹底的追求 この愛は正常か異常か!」『週刊少女フレンド』1970年41号 p.167）

「シークレット・ラブ」を著した矢代まさこがいる。「シークレット・ラブ」は「S関係の徹底的追求」で示される例に類似した、主人公が親友と青年の仲に嫉妬しつつ、自身の親友への思慕が逸脱ではないかと苦悩する物語だが、矢代は当作品を「学園ドラマ」に対する「自分なりの突張」から「“エス”の世界を描きたかった」¹²⁴のだという一方で、戦前の少女文化については「瀬戸内晴美だの吉屋信子だの、一切読んだこともない」¹²⁵とも語っており、矢代のいう「“エス”」と戦前の「S」の断絶が読みとれる。

第二に、同性間の親密性を戦前の「S」の論理により「レズビアン」と区別する認識もみられた。『フレンド』1970年21号の読者相談¹²⁶では、「女のわたしが、女の人をすきになるなんて、変態なのでしょうか」という読者相談に、教育評論家・阿部進が「『すきになる。』ってのは、あいてが男であろうと、女であろうとかまわない」「その先輩に、『おねえさんになってください。』と、ていねいにたのみなさい」と回答する。また阿部は『りぼん』1970年10月号¹²⁷でも、「かわいい女の子ばかりに心をうばわれ」る自分は「ふつう」じゃないのではないという相談に対し、「君達のおかあさんが少女のころは女学校と言って、女ばかりの学校にかよっていたから、『やさしいお姉さま、わたしをS（シスター）にしてくれ』なんていって、君のようなのがふつうだった」「ぎゃくに、男の子をすきになると、不良あつかいだった」と、こちらでは「S」「女学校」を明示し回答している。同性への思慕を逸脱視する意識を、戦前のSの存在を提示することで相対化しつつ、異性愛規範との葛藤という論点をずらすのである。この論理がみられる漫画家に『ベルサイユのばら』の池田理代子があり、作品における同性間

の親密性は「母親から聞いた女学校時代のいわゆるS」を参照したと語り^{▷128}、「女性は、例えば女学生だと男性代わりに「お姉様」って感じで憧れるんですね」「[引用者注：海外では] オスカルみたいな女性はレズビアンとしかとらえられないんです」^{▷129}という。Sの論理に立脚しつつ、女性の女性に対する憧れを、「レズビアン」と区別している。

この2つに、戦前の少女文化と関連付けられない同性の「恋愛」ないし「レズビアン」^{▷130}を加えた3つが、当時の少女漫画での「女性同性愛」の現れ方である。そこには、同性間の親密性を独自の論理で包摂しようとする少女文化の立場が伺える。第二の現れ方における阿部の回答では、戦前の少女文化の論理が異性愛規範の中で「同性愛」的親密性を正当化する抜け道として機能している。その機能は第一の現れ方における「S関係の徹底的追求」にも見て取れよう。「友情/レズビアン」という「正常/異常」の二項対立を、「S」という中間地点を設けて連続体化することで、読者に異性愛規範を語りかけつつも、同性間の「同性愛」的親密性を「まだ完全に『異常』ではないもの」として包摂する余地を残す^{▷131}意図があったのではないか。但し、こうした「包摂」の論理において「レズビアン」は常に否定的に参照されており、また物語にも「レズビアン」自認の人物が存在しないことを考えると、それが根本的には異性愛規範に即した見方であり、「レズビアン」の排除と表裏一体だったことは指摘しておかねばならない。

6 結論

最後に、本稿の知見を改めて整理しつつ、そこから見えてくる「女同士の絆」の表象の可能性と、今後の課題を論じる。

創刊時の『フレンド』は、戦前と連続した旧来的価値観が土台にあり、それに基づき同性間の親密性は価値づけられていた。それが1960年代半ばから旧来的少女文化からの転換が生じ、異性との親密性が中心化し始めると同時に、同性間の親密性は既存の価値を失い、既にある身近な存在として描かれるようになった。しかし、だからこそ読者にとって馴染みやよく共感しやすい関係となり、1960年代後半に恋愛が定着して以降は、読者の等身大の現実を描く主題や、読者に愛や性の問題を考えさせる媒介としても登場した。

また異性愛の定着は、異性愛の少女漫画における規範化を伴い、同性間の親密性の表象も、友情の周縁化・劣位化や強固な親密性の逸脱視など、異性愛規

範のジェンダー秩序を反映するようになった。だが、物語に異性愛規範と衝突しない構造を設定することで強固な親密性は描かれており、また「女性同性愛」的親密性の逸脱視を、独自の論理の構築や戦前の少女文化の論理の援用によって相対化する試みも見られた。

「女同士の絆」の可能性という観点からすれば、本稿で描き出した半面は確かに、同性間の親密性は異性愛規範のジェンダー秩序を反映して描かれるものであり、恋愛と比して価値づけられない、ということを示している。しかしもう半面では、身近な友情を称揚すること、恋愛を大切にしつつ女同士の友情も大切にすること、異性愛規範との葛藤を回避したりずらしたりする中で強固な親密性を描くこと、戦前の少女文化など異なる価値体系により異性愛を相対化することにより、異性愛規範の中にあっても少女漫画が同性間の親密性を描き続けていたことも示された。これは、「女同士の絆」の表象可能性の手掛りを提示しているだろう。

ただし本稿の検討内においては、異性との親密性よりも強固な同性間の親密性は逸脱視されており、また「レズビアン＝女性同性愛者」という主体が一貫して他者化されていたことも忘れてはならず、同性間の強固な親密性を描くことに限界が存在していたことも確かである。本稿では『フレンド』の1963～72年を分析対象としたが、これに留まらず、他の少女漫画雑誌や女性メディア、またこれ以降の時期も検討し、「女同士の絆」の表象可能性を掘り上げていくことが必要である。

◆ 註

- 1 東園子『宝塚・やおい 愛の読み替え 女性とポピュラーカルチャーの社会学』新曜社、2015、p.15。
- 2 アドリエンヌ・リッチ、大島かおり訳「強制的異性愛とレズビアン存在」『アドリエヌ・リッチ女性論 血、パン、詩。』1989、p. 72。原著は1980年。
- 3 同上、p.69。
- 4 同上、p.64。
- 5 東、前掲註1、p.48-49。
- 6 例えば赤枝香奈子「女同士の親密な関係にみるロマンティック・ラブの実践「女の友情」の歴史社会学に向けて」（『社会学評論』第56号第1巻、2006、pp. 129-146）、杉浦郁子「映画『下妻物語』に描かれる女同士の友情—親密性をめぐる誤読の快楽と政治」（『新社会学研究』第2号、2007、pp. 25-35）、レティツィア・グアリーニ「男性支配的社会における女性間の友情物語 — 角田光代『対岸の彼女』に見る女同士の絆」（『ジェンダー研究』お茶の水女子大学ジェンダー研究所、2019、22号、pp.111-129）など。

- 7 本稿では「少女文化」を、「10代の女性を受け手とする大衆文化」(宮台真司・石原英樹・大塚明子『増補サブカルチャー神話解体 少女・音楽・マンガ・性の変容と現在』ちくま文庫、2007、p.99)として定義する。
- 8 こうした葛藤の中での異性愛描写導入を実証的に検討した研究として、日高利奈「Kissのある日常―『週刊マーガレット』におけるキスシーンの定着過程」(小山静子・赤枝香奈子・今田絵里香編『セクシュアリティの戦後史』学術出版会、2014、pp.221-243)などがあるので、参照されたい。
- 9 この点は、戦前の少女文化においてもそうであったことを、ここで強調しておきたい。後述するように、最初期の戦後少女漫画は戦前の少女文化に埋め込まれた規範的側面を強く引き継いでいたとされている。本稿も戦前の少女文化については、2、1で論じるように、社会的規範に適合的なものとして設定された「少女」に課される規範を主に捉えていくこととなる。しかし、戦前の少女文化においても「少女を教育的な言説に封じ込めるのだけではない、さまざまな物語が描かれ」ていた(嵯峨景子「吉屋信子から氷室冴子へ 少女小説と「誇り」の系譜」『ユリイカ 特集百合文化の現在』青土社、2014、p.58)。例えば今田絵里香は吉屋信子の作品に「親きょうだいへの反抗」「男性嫌悪」「結婚の拒否」「少女達たちの自立」といった「家族・男性・強制的異性愛の対抗文化」(今田絵里香『「少女」の社会史』勁草書房、2007、pp.212-218)としての性質が存在していたことを指摘している。さらに、当時の少女雑誌の読者が「エスという関係のルールが持ち込まれ」た「少女ネットワーク」を形成し、「ときにそれは結婚後も維持されるものになり得た」(今田、同、pp.221-222)ように、そうした対抗的性質は物語内に留まらず、現実の少女達にもまた共有されていたのである。本稿の射程からはこの点を十分に論じることはできないが、こうした戦前の少女文化の対抗的性質の重要性を見のがしてはならない。
- 10 赤枝香奈子「戦後日本における「レズビアン」カテゴリーの定着」、小山静子・赤枝香奈子・今田絵里香編『セクシュアリティの戦後史』学術出版会、2014、pp.130-131。
- 11 イヴ・K・セジウィック、上原早苗・亀澤美由紀訳『男同士の絆 イギリス文学とホモソーシャルな欲望』名古屋大学出版会、2001。原著は1985年。
- 12 ニクラス・ルーマン、佐藤勉・村中知子訳『情熱としての愛―親密さのコード化』木鐸社、2005。原著は1982年。
- 13 東、前掲註1、pp.26-64。
- 14 同上、pp.48-49。
- 15 同上、pp.64-71。ただし東自身、先行研究の「丁寧な議論を損なうとの批判は覚悟の上で」(p.68)と留保している。
- 16 赤枝香奈子『近代日本における女同士の親密な関係』角川学芸出版、2011、p.104。
- 17 「S」「エス」という表記ゆれが存在する。本稿では「S」として表記し、引用箇所は引用元の表記に倣う。
- 18 赤枝、前掲註16、pp.102-137。
- 19 「少女」に課せられる「純潔」規範に関しては、渡部周子『〈少女〉像の誕生 近代日本における「少女」規範の形成』(新泉社、2007)などを参照されたい。
- 20 今田、前掲註9、p.212。
- 21 同上、p.190。
- 22 同上、p.204。
- 23 同上、p.229。

- 24 同上、p.204。
- 25 ただし日高（前掲註8、p.226）による、『『少女画報』（東京社）では1939年に男女の恋愛を描く作品が既に登場して』いるという指摘もあり、異性ととの親密性の表象がどうであったかについては検討の余地がある。
- 26 この背景には、少女文化を取り巻く社会の変化との関連が指摘できる。千田有紀『日本型近代家族 どこから来てどこへ行くのか』（勁草書房、2011、pp.17-27）によれば、戦後、愛・性・生殖が結婚により結びつけられるロマンティック・ラブ・イデオロギーが、日本社会においても急速に広まり、また見田宗介「ベストセラーの戦後日本史—社会心理史の時期区分」（『思想の科学 第5次』思想の科学社、第18号、1963、pp.86-92）によれば、一般書籍でも性および恋愛の問題を扱った文学作品、解説書などがベストセラーに並んだ。藤本純子は「戦後期少女メディアにみる読者観の変容—少女小説における「男女交際」テーマの登場を手がかりに」（『出版研究』日本出版学会、第36号、2005、pp.75-93）にて、『女学生の友』が異性ととの親密性を導入した要因を、学校制度が男女別学から共学へと変化したのに伴い、雑誌が読者の男女交際への関心に応えようとしたのだと論じている。また今田絵里香『「少年」「少女」の誕生』（ミネルヴァ書房、2019、pp.401-464）は、社会変化と少女文化の変化の関連について、男女共学化に伴う男女間の恋愛の導入と並んで、戦前の少女雑誌が都市新中間層の女子を読者に想定していたのに対し、戦後に高等教育進学者が増加したこと都市新中間層の階層的権威が失われ、戦後の「少女」は階層文化の後ろ盾を失い、都市新中間層にとどまらず、幅広い階層に普遍的に存在する存在になったことを指摘している。
- 27 今田（前掲註9、pp.229-231）によれば、総力戦体制下において「これまでの「少女」はパッシングされてい」き、「清純主義をセンチメンタリズムとして位置づけ、その価値を引き下げ」る言説が社会的に広まったという。これを踏まえると、Sは戦時中から既に排除されていたものと考えられる。
- 28 今田絵里香『1945～70年の少女文化とジェンダー』京都大学グローバルCOEプログラム親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点、2011、pp.5-6。
- 29 同上、p.11。
- 30 赤枝、前掲註10、pp.129-151。
- 31 戦前の少女雑誌にも漫画は掲載されたが、その漫画比率は低く、今田絵里香『「少年」「少女」の誕生』（ミネルヴァ書房、2019、p.57）によれば『少女の友』1935年6月号の漫画比率は3.5%だった。秦美香子「少女漫画と『少女』の構築：現代日本におけるジェンダーの二様相」（神戸大学大学院総合人間科学研究科博士学位論文、2009）では、戦後『リボンの騎士』が人気を博して以来、少女雑誌は少女漫画作品の掲載数を増加させ、1950年代末には、少女雑誌の記事の大部分は漫画作品になった（p.41）と指摘されている。また少女小説雑誌は、男女間の恋愛を導入した『女学生の友』を除き、60年代前半までにすべて終刊している（今田、同、p.422）。
- 32 1950～60年代、「母の会連合会」等の民間団体、新聞、また警察や行政などにより行われた、「不良出版物」とされる書物を取締ることを目的とした一連の規制運動の総称。当初はカストリ雑誌や大人向けの赤本が問題とされたが、やがて子供向けの漫画も俗悪であるとして排除の対象になっていき、漫画家や出版社は対応を迫られていた（長岡義幸、『マンガはなぜ規制されるのか「有害」をめぐる半世紀の興亡』平凡社新書、2010、pp.94-123）。
- 33 押山美知子『少女マンガジェンダー表象論—〈男装の少女〉の造形とアイデンティ

- ティ」、彩流社、2007、pp.83-95。
- 34 秦、前掲註31、p.70。2004年11月19日「公開座談会：証言・黎明期の少女まんが作品と作家たち」（京都精華大学表現研究機構主催）での、水野英子、丸山昭、竹宮恵子による発言。
- 35 同上、p.70。
- 36 米沢嘉博『戦後少女マンガ史』ちくま文庫、2007、p.73。初出は1980。
- 37 Shamoon, Deborah Michelle *Passionate friendship : the aesthetics of girls' culture in Japan*, University of Hawai'i Press, 2012, pp.90-100。
- 38 秦、前掲註31、p.71。
- 39 米沢嘉博『戦後少女マンガ史』新評社、1980。
- 40 秦、前掲註30、pp.72-74。
- 41 今田、前掲註28、p.2。
- 42 藤本由香里『私の居場所はどこにあるの？少女マンガが映す心のかたち』学陽書房、1998、pp.180-184。
- 43 同上、p.191。
- 44 雑誌に記載された年月日と、実際の年月日にはずれがあり、雑誌の方が実際の暦より早い。以下、雑誌や掲載作品に係る年表記については、雑誌の年度を参照する。
- 45 石子順造『戦後マンガ史ノート』精選復刻紀伊國屋新書、1994、p.121。初出は1975。
- 46 同上、p.119。
- 47 『「少女マンガを語る会」記録集 座談会1999年～2000年（全4回）』、甲南女子大学文学部メディア表現学科増田のぞみ研究室、2020、pp.88-89。
- 48 同上、pp.78-79。
- 49 日高、前掲註8、p.225。
- 50 宮台他、前掲註7、p.107。
- 51 同上、p.99。
- 52 同上、p.103。
- 53 国会図書館デジタルアーカイブにて確認。欠号として、1964年50号、1966年37号、1968年8、12、27、51号、1969年12、42号、1970年8、43号は確認できなかった。
- 54 後者において「表象される」こと、「固有名を持つ」こと、「ストーリーの中心人物と関わる」ことを基準にするのは、例えばただ「友だち」としてのみ提示される図像のように、人物としての具体性を欠いた表象を分析から除き、キャラクターとしての固有性が十分に認められる表象のみを分析の俎上に乗せるためである。なお、異性装の人物は、「女子/女性であることが初めに示され、場合により男装する人物」「初めに女子/女性として表象され、物語の中で実は男子/男性だったことが明かされる人物」を記録した。
- 55 作品および次号予告を確認した。明示される親密性の基準として、以下の単語が登場する関係をカウントした。友人関係を示す「友（友だち、友情など）」「フレンド」「なかよし」「なかなかおり」。家族として表象される人物以外に用いられる「姉」「妹」。集団意識・仲間意識を示す「○人組」「トリオ」「仲間」「味方」。その他の親しみを示す、「すき」「あこがれ」「愛」「恋」。表記揺れや活用形を含む。
- 56 本稿では、掲載が2号以下の作品を「読切」、3号以上にわたる作品を「連載」として区別している。
- 57 同一の関係が複数年・複数の分類にわたる場合、その関係が主に登場するひとつの年、

その関係の物語上の役割として大きいと思われるひとつの分類に割り振った。

- 58 『週刊少女フレンド』1963年20～1964年12号にて連載。
- 59 『週刊少女フレンド』1963年1～32号にて連載。
- 60 宮台他、前掲註7、p.101。
- 61 今田、前掲註31、p.271。
- 62 米沢、前掲註36、p.74。
- 63 同上、p.148。なお、「外国への憧れ」は一方で水野英子のような「外国を舞台にしたイキでおしゃれなロマンス」（米沢、前掲註36、p.148）にも表れている。しかし『フレンド』においては、1963年に外国と繋がりのある女子と日本の女子の友情を描く連載作品が3作掲載され、続いて1964年に初めて、外国における男女の恋愛が読切2作、連載1作で掲載されている。このように、『フレンド』において「外国へのあこがれ」は、外国を舞台にした恋愛よりも先に、友情と結び付いていた。
- 64 『フレンド』では、1964年29、30号に掲載された、松本あきら・牧美也子「ラインの小箱」にて、男女間に「すき」という言葉が用いられ、これが明示された異性の親密性の最初の例である。この後も男女を描く物語は登場しているが、言葉により明示され、男女間の親密性が表象されていると明らかに解釈できるものは、1965年までは少ない。
- 65 『フレンド』では、1964年47、48号に掲載された、近世日本を舞台にした「十二夜の琴」（わたなべまさこ）にて、一人の青年に二人の娘が好意を寄せ、一方が好意を諦める、という展開が描かれており、これが『フレンド』で最初に描かれた三角関係といえる。また1965年39号には、中世ヨーロッパ風の城を舞台とした高橋真琴「白ゆりの城」で、意地悪な姫が王子に、王子が清純な少女に好意を寄せる、という三角関係が描かれている。
- 66 米沢、前掲註36、pp.164-178。
- 67 『週刊少女フレンド』1967年21～24号にて連載。
- 68 『週刊少女フレンド』1967年21～24号にて連載。
- 69 『週刊少女フレンド』1965年23号～1966年11号にて連載、ただし同性間の親密性を主題としたエピソードはいずれも1966年に掲載。
- 70 『週刊少女フレンド』1966年28号～46号にて連載。
- 71 例えば、津田幸夫・細川知栄子「真珠のいのち」（『週刊少女フレンド』1967年23～40号にて連載）では、劇団に入団した主人公に対し、同年代の女子が親しげに話しかけ、友情が形成されたことが示されるが、その後彼女は1話につき主人公と数回程度会話を交わすのみの存在として登場し、物語に関わることがない。
- 72 なお、この頃より、主人公の友人であると解釈できる人物が、「主人公の友人である」という解釈が自明に成立するが故に、作品やあらすじ等でわざわざ「友人」等と言及されないケースが登場する。親密性の基準を文字情報に設定した本稿では、このようなケースを分析に含めることができなかった。この点は本稿の方法論的限界である。
- 73 宮台他、前掲註7、p.110。
- 74 典型的な例として、乾東里子・藤井由美子「ロングヘアのビーナス」（『フレンド』1971年16号～31号）がある。主人公は青年に淡い好意を抱いているが、まだモノガミータ的な恋愛関係には至っていない。しかし主人公の親友は、主人公に「恋」人がいると勘違いし、「そういう人ができたらまさきにうちあげようって幼稚園からの約束だったじゃないの」「親友をうらぎるのね あなたには十五年間の友情なんかどうでもいいのね!」「紹介しなさいよ あしたその人にあわせなさい!」と主張する（20号 pp.195-

196)。その後、主人公は青年と親友を対面させるが、「気をきかしなさい！」と親友を帰らせ、親友は「あたしぜったいに女の友情なんて信じない！」と怒る(20号p.202)。このコメディ的な一幕において、女子の「友情」の一要素として互いの「恋」の共有というものが存在し、しかし異性との「恋」は時に女子の「友情」とは相容れないものとなるという、同性間の友情と異性の恋愛の微妙な関係が浮き彫りにされている。

- 75 『週刊少女フレンド』1968年13～21号にて連載。
- 76 『週刊少女フレンド』1968年36号pp.183-213。
- 77 巴里夫「『貸本マンガ』の思い出」、『別冊太陽 子どもの昭和史 少女マンガの世界Ⅰ 昭和二十年～三十七年』平凡社、1991、pp.124-125。
- 78 本節の最後に、本文では扱えなかった類型を論じよう。まず70～72年にかけて「援助①」が再び出現しているが、ここでは警官と依頼人、ラジオDJとリスナーなどの組み合わせも登場していた。「女子」ではなく「女性」が担い手であり、またその「職業」が行動の動機にある「援助」の登場は、「少女の優しさによる問題解決」が強調された1963～65年とは異なり、ここに断絶を見ることができる。またホラー漫画について、1968年以前は呪いや妖怪の影響を受けて「友だちが主人公を襲う」ないし「主人公が友だちを襲う」ものが多く描かれていた。しかし70年以降のホラー漫画ではそのような類型は減り、代わって「主人公と友人が共通の怪奇現象に巻き込まれ、先に友人が被害を受ける」ものが増える。1968年以前のホラー漫画に「少女マンガにおける『幸せの形』」に対する「逆説的パターンをと」という「怖がらせのテクニク」を指摘する米沢(前掲註36、pp.162-163)の見方に従うならば、「友だち」の存在に価値が置かれていたからこそ、その価値体系を転覆させる「友だちに襲われる」「友だちを襲ってしまう」という「怖がらせ」が成立するのである。これを踏まえると、1969年を境とするホラー漫画の類型の変化は、その背景に「友だち」の価値づけの変化があったことを示唆していると言えるだろう。
- 79 「『女性同性愛』的」と表記しているのは、作品や記事で必ずしも「同性愛」という言葉が用いられているわけではないためである。ここでいう「女性同性愛」的親密性とは、女子/女性間の親密性が自他に「友情」とは差異化されたものとして認識された「恋愛」的なものである、という解釈が成立するように描かれているものを指している。
- 80 米沢、前掲註36、209-213。
- 81 粉川宏・松永りこ「おとなへの朝」『週刊少女フレンド』1971年39号、p.180。「危険なまがり角シリーズ」の1作。
- 82 『週刊少女フレンド』1969年51号～1970年50号にて連載。
- 83 『週刊少女フレンド』1969年51号、p.19。
- 84 『週刊少女フレンド』1970年42号、p.102など。
- 85 今田絵里香「ジュニア小説における性愛という問題」、『成蹊大学文学部紀要』成蹊大学文学部、第52号、2017、pp. 23-46。
- 86 教育的機能をカモフラージュに用いるという雑誌の戦略を指摘した研究に押山(前掲註33)がある。押山は池田理代子『ベルサイユのばら』連載当時の『マーガレット』の読者投稿欄の変化に注目し、〈男装の麗人〉オスカルを恋愛対象であるかのように見る女子読者が増えたことに対し、「少女読者たちに同性愛志向を植え付けるとの批判をかわす」(p.215)ために「『ベルサイユのばら』が教育的にすぐれた作品だとアピールする」(p.215)ような投書が選択的に掲載されたのではないかと指摘している。
- 87 藤本、前掲註42、p.19。

- 88 秦、前掲註31、p.71。
- 89 日高利泰「1960年代の少女誌における恋愛の主題化と『少女』の性的身体」京都大学大学院人間・環境学研究科修士学位論文、2013、pp.38-39。
- 90 同上、p.37。
- 91 確認できた最初の作品は、『フレンド』1965年35～42号にて連載された、北島洋子「ロレッタ」である。但し主人公に身近な年上の女性というだけであれば、先述の「なくなパリっ子」にも年長女子の結婚のエピソードは登場する。
- 92 『週刊少女フレンド』1969年34号、pp.213-243。
- 93 『週刊少女フレンド』1969年34号、p.243。
- 94 『週刊少女フレンド』1970年43号～1971年15号にて連載。
- 95 大塚英志「少女まんがの消費社会史—「24年組」の発生と終焉—」、井上俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・吉見俊哉編『岩波講座現代社会学21 デザイン・モード・ファッション』岩波書店、1996、p.183。
- 96 『週刊少女フレンド』1970年45号、p.48。
- 97 『週刊少女フレンド』1970年44号、p.36。
- 98 『週刊少女フレンド』1970年47号、p.38。
- 99 『週刊少女フレンド』1970年42号、p.178。
- 100 例えば、副題として「あなた自身の日記から…」という文言が添えられていた。
- 101 乾東里子・朝倉じゅん「新・ボーイハント入門」、『週刊少女フレンド』1971年15号、p.137。
- 102 堀寿子・神奈幸子「ミニのあの子は応援団長」、『週刊少女フレンド』1970年7号、p.48。
- 103 乾東里子・朝倉じゅん「新・ボーイハント入門」、『週刊少女フレンド』1971年13号、p.220。
- 104 阿部律子「すえっこ台風」、『週刊少女フレンド』1971年29号、p.71。
- 105 本文で挙げなかった、女性同性愛を意識したと思われる作品の残り1作は、『フレンド』1971年43～50号にて連載された丘けい子「黒いプリンセス」である。通訳の女子が外国の王女に出会い、はじめは姉妹のような友情、やがて恋愛感情を抱くようになり戸惑うが、王女が実は女装した王子だったと判明し、死別で終わる。これは、読者の体験とは違い物語として描かれている点、また異性装という種明かしにより表象の上では「同性愛」的な物語を描きつつ内容面では「同性愛」を回避している点が、特徴として挙げられる。
- 106 『週刊少女フレンド』1970年2～28号にて連載。
- 107 Verena, Maser *Beautiful and Innocent: Female Same-Sex Intimacy in the Japanese Yuri Genre* (Universität Trier Doctoral Thesis、2015) では、女性間の恋愛親密性を描いた最初の少女漫画は『デラックスマーガレット』(集英社)1970年10月号の矢代まさこ「シークレット・ラブ」(p.54)、女性間の恋愛キスを描いた最初の少女漫画は恐らく『りぼんコミック』(集英社)1971年3月号の山岸涼子「白い部屋のふたり」(p.57)だろう、としているが、「こまっチャーム」の描写はその2作よりも早い。
- 108 『週刊少女フレンド』1971年50号 pp.177-240。
- 109 『週刊少女フレンド』1971年50号 p.237。
- 110 確認できたのは、剣わたる・古賀新一「死人島にさく花は」(『フレンド』1970年25号 p.176)、藤木靖子・菅沼美子「マグノリアの天使」(『フレンド』1972年20号 p.208)である。
- 111 『別冊太陽 子どもの昭和史 少女マンガの世界Ⅱ 昭和三十八年～六十四年』1991、平凡社、p.29。『フレンド』では、神保史郎・望月あきら「サインはV!」(1968年42

- 号～1970年52号)や津田幸夫・細野みち子「金メダルへのターン」(1969年20号～1970年46号)などがある。
- 112 山口理恵子「女性アスリートによる『性の商品化』をめぐるスポーツ規範と『構成的外部』」『年報社会学論集』関東社会学会、第18号、2005、pp.77-88。
- 113 阿部潔『スポーツの魅惑とメディアの誘惑』、世界思想社、2008、p.63。
- 114 同上、p.63。
- 115 同上、p.79。
- 116 とはいえ少女漫画のスポーツ漫画においても、「女らしさ」と「スポーツする身体」の葛藤は生じうる。これに関して、押山美知子が「浦野千賀子「アタックNo.1」にみる身体表象 スポーツと女性身体の関係性」(『専修国文』専修大学日本語日本文学文化学会、第96号、2015、pp.19-48)にて指摘を行っている。
- 117 2人の場合と比べて3人組では三角関係が生じない(生じにくい)構造でもあり、友情を描くのに適しているといえる。
- 118 『週刊少女フレンド』1971年50号～1972年6号。
- 119 『週刊少女フレンド』1971年50号、p.18。
- 120 『週刊少女フレンド』1972年1号、p.132。
- 121 赤枝、前掲註10、pp.142-145。
- 122 ここで、戦前的な少女文化の要素を(それを逸脱的なものとして描くか否かに関わらず)、ステレオタイプとして登場させること自体は、60年代から存在していたことを付言しておく。例えば、『フレンド』1967年15号の青池保子「さらばひざ下20センチ」は、「八十年の伝統をほこる、名門のミッションスクール」(p.198)の女学院が登場し、「明治時代の遺物みたいな」(p.212)制服が女生徒たちによって改革される物語である。また作中では、上級生に対する「おねえさま」呼びが、主人公によって「へっいやあね少女趣味だわおねえさまなんて!」(p.207)と語られる。このようにこの作品は、伝統的な「少女」像と現代的な「少女」像を対比し、前者を戯画的に描きながら後者を肯定するのである。
- 123 『週刊少女フレンド』1970年41号、pp.167-171。
- 124 『少女マンガ大全集』、文芸春秋、1988、p.751。
- 125 前掲註47、p.122。
- 126 「カバゴンのずばりなやみ解決!」『週刊少女フレンド』1970年21号、pp.156-157。
127 「カバゴンのなやみ相談室 こんな人はこまる!」『りぼん』1970年10月号、集英社、p.296。
- 128 「「ベルばら」の世界は不滅です。」『潮』潮出版社、1990、pp.250-260。
- 129 「古今亭志ん朝対談 えーちょっと伺います」『週刊読売』読売新聞社、1979、pp.118-122。
- 130 高遠静香「女ともだち」(集英社『りぼん』1970年12月号掲載)、山岸凉子「白い部屋のふたり」(集英社『りぼんコミック』1971年3月号掲載)など。いずれも同性間の親密性が「レズ」として外部から嘲笑される。山岸は『CREA』1992年9月号のインタビューにて、自身が「初めてホモセクシュアルを扱った」作品として『ゲッシング・ゲーム』を挙げ、「女性同士のは前からありましたし、兄弟愛や友情にちょっとその香りがするものはあった。でもストレートに男性の同性愛を扱ったものは、なかったのですね」と語ったあと、「白い部屋のふたり」について「あれもね、実は、男同士のつもりで描いたんですよ。まだそういう世界に魅かれる自分って異常だと思ってたし、とても

許されないだろうと思ってたので、つまり苦肉の策」と語っている（『山岸凉子「日出処の天子」を語る」文芸春秋、pp.84-85）。ここからは、山岸が「白い部屋のふたり」を、前からあったという「女性同士」の物語ではなく、「ホモセクシュアル」なものとして捉えていたことがうかがえる。また、男性同士は描けずとも女性同士の親密性ならば「苦肉の策」として描くことができたという語りからは、女性同士の「同性愛」的な親密性を受容する素地が少女文化に存在していたことを示唆している。

- 131 また、「S」＝「シスター」という名称を提示することによって、同性間の親密性を姉妹愛になぞらえ、それが必ずしも「異常」なものではないと認識させる機能も考えられる。作品においても、藤本由香里「『百合』の来し方「女どうしの愛」をマンガはどう描いてきたか？」（『ユリイカ 特集百合文化の現在』青土社、2014、pp.101-109）が70年代初期の「『女どうしの愛』はなぜか姉妹設定である」（p.102）ことが多いと指摘しているが、これについても「女性同性愛」的な「女どうしの愛」を家族の愛に回収することで、ジェンダー秩序の侵犯を回避する意図が想定できるだろう。